舍利蔵自然林のなぎの木

舍利蔵自然林内の開けたところにある5本のなぎの大木は、718年に建てられた勝宝寺の跡を示しています。この林には小さなお堂が15ほどあったと言われていたのですが、950年頃に焼けてしまいました。は木々の間に、小さな観音堂と鐘楼があり、両方とも比較的には最近建てられたものです。

5本のなぎの木は、樹齢800年を超えられています。地域の言い伝えによると、鐘楼のそばにある一番大きななぎの木は、尊敬されている僧の行基(668~749年)がインドから持ち帰った若木が育ったものだということです。行基は、奈良の東大寺を建設するための資金を集めた僧です。行基は、勝宝寺を創建したときにこの木を植えたと考えられています。

なぎの木は、寺社の敷地によく見られます。その葉は厚く、ちぎりにくい葉脈が縦に走っています。この強い葉は、不運からのお守り、またカップルの間の絆を象徴するお守りとして人気があります。この5本のなぎの木には、舍利蔵公民館のそばにある竹の生えた道を進むとたどり着けます。